



ランボー、汝、神よ（一）



多谷 昇太



（二）プロローグ

月明りに魅せられてビルの陰から一人のピエロがさまよい出る。ピエロは見失った友コロンビーヌを捜しているのだろうか？聞こえ来る波の音、潮の香に誘われるままに街角から海へと、港へと向かって行った。やがて眼前に広がる港のパノラマ、人気の絶えた深夜の山下公園。あまりに素敵なその夜景に、ピエロは友を捜すことも忘れて、魅入られたようにその場に立ち尽くした…。



「みなど」
港だ、夜の。



風が頬に冷たい。
停泊中の船の灯りが美しい。
波に照り映えてゆらゆら揺れるその様は
海に金色の帯をながしたようだ。
遠くからウインチの音が聞えてくる。
人夫たちのかけ声も。

さても今

港は眠っている。

波の揺り籠にゆられ、夜の闇に包まれて。

俺も帰って寝ることとしよう。

波の音がいかに心地よくとも

潮の香がいかに芳しくとも

今は帰ることとしよう。

港よ、お前もそのまま眠り続けるがいい、
静かに…

だがもし、

太陽が天空の真ん真ん中来、

人々が薄地の服を纏うようになったら

港よ、甦れ！

すべての活気を取り戻せ！
その時俺は行く。

聖なる都パリへ、フランスへ。ランボーとなって！



【横浜・山下公園、水の守護神像】

(二) 真夜中のギター

寒い！膝を抱え込んで座り込んだ床から冷気がジンと伝わってくる。十二月下旬の深夜のこと、横浜は西区紅葉ヶ丘の高台にある掃部山公園のトイレの中で、年の頃18、9の青年がやるせなげに寒さに震えていた。ついさつきまで公園のベンチにいて同様に震えていたのだが、年末の地域パトロールの連中に見咎められて、一度公園から出てやり過ごしたあとまた帰って来て、致し方なく公園のトイレの中に身を潜めたのだった。青年のポケットには硬貨で数百円があるのみ、殆ど無一文の身である。なぜこうなったかと云うとつい数時間前は自宅で父親と口喧嘩となり、「出て行け！」「おう、出て行ってやる」の応酬のあと着の身着のまま家を飛び出したのだ。しかし飛び出したはいいがとんと行く当てもなく、考えた末に日頃から受験勉強で通っていた紅葉坂図書館脇のこの公園を思い出し、自宅は川崎市高津区で離れていたのだが、バスと東横線を乗り継いでここへやって来たのだった。父親との諍いの経緯、また青年自身の経緯は追々後述しようがただひとつだけ言及しておこう。青年にとって横浜は、就中この掃部山公園はとても思い入れの強い地だっ

たのだ。もう久しく彼の生活は（生活態度は）恰も皮膚病の自家感作症のごとくにうっ積、且つ自己中毒していて、皮膚病で搔きむしりを防ぐためにステロイド剤を塗布するように、この地に來ることでみずからを癒していた。すなわち受験に失敗して父親の期待を裏切り悶々としていたのと、性格の暗さゆえに灰色の学校生活を送らざるを得なかったというその過去が相俟って、自家中毒を引き起こしていた。それをこの地を訪うことで癒していたのだ。桜木町駅から日大通りを歩いて山下公園まで行ったり、高台にあった県立紅葉坂図書館に行つてはある人の著作に耽り、隣接していた掃部山公園で憩うては夢想に耽つたりしていた。その夢想がステロイド剤に当たる分けだがそれは何かと云うに、すなわちランボーとその生き方、つまり（世界中の）放浪だった。耽つていた著作とはランボーやホイットマンの詩集であり、デュ・モリアの小説だった。殆ど麻薬のようにこれらの書物は彼を引き付け放浪へと誘つた。進路を見失ひ行き場を見失つた彼はもうとにかく自分自身とこのうっ積した環境に嫌気がさして、ここから飛び立ちたかったのだ、離れたかった。いつの

日かハマの大栈橋から船に乗り、外国へと、毎日が新鮮でめくるめくような、「寶石が覆されたような場所へ行つてみよう」と夢見ていた。そしてそれがゆえの家出後における、殆ど無意識のような掃部山公園への訪問だった分けだ。トイレの床の上で寒さに両膝を引き寄せながら彼は数時間前のおのれの行状を思い起こしていた。住まいは川崎市内の団地で、飛び出した直後その団地の敷地を駆け抜けながら彼は「ちきしょう！やつてやるぞ！俺はやつてやるぞ！」と大声で連呼していたのだつた…。

殆ど一睡も出来ないうちに夜が明けた。寒さにこわばつた身体をほぐしながら立ち上がると青年は洗面台へと行つて手と顔を洗う。幸い表は朝から晴れていて風もなく小春日和が予想された。「さて…どうするか」青年は独り言ちた。馴染んだ桜木町、掃部山公園まで来たはいいが当地に友人や知り合いなどおらず、いやそれどころかそもそも青年には端っから友人など一人もいなかったのだ、家出の当初から極まるしかなかった。水飲み場で水を飲んだり散策を装つたりベンチに腰掛けたりして時間をつぶす。その間妙案を練つたが何も浮かばない。ただひとつ

家におめおめと帰ることだけはしたくなかった。必死になって方途を探るうちに眠気がさして来る。昨晩は寒さと興奮の内に過ごし殆ど寝ていない。いつの間にか青年はベンチの上で寝入っていた。やがて何かの音が気配で目を覚ます。カラスが飛び回っていたのでこいつが何かしたか、とにかく青年は立ち上がって大きく伸びをするとやおら歩き出し、高台からハマの巷へと降りて行つた。何かの本能かあるいは超常的な誘いでも受けたものか、横浜公園辺りを通つて横浜中華街へと向かつて行く。なんとなく『飲食街に行けば住み込みの仕事があるかも知れない』と思ひ浮かんだのは確かだが、それだつたらより近く、馴染みのある伊勢佐木町界隈か馬車道辺りへ行きそうなものを、なぜかその名前と存在だけは知っていたが一度も訪つたことなどない中華街へと足が向かつていたので。港高校側から中華街へと入つて行く。左右に点在する横文字看板を掲げた米軍相手の飲み屋街をめざらしげに眺めながら善隣門の前に立つた。もちろん往時は名前など知りもせず、始めて目にするエキゾチックなその門の構えと中華街大通りの店々に青年は圧倒されるばかりだ。時刻

はいつの間にか昼時になつていて通りからはこちらもエキゾチックな中華料理のいい匂いが漂つて来ていた。その匂いに誘われるように大通りに入つて行くくと案の定と云うか、幸いにと云うべきかあちらこちらの店々の入口に「コック・ボーイ募集、通住可」の張り紙が貼つてあつた。余りにも大仰な構えの大店は気が引けたのでそれほど大きくはないがしかし個人店とは明らかに違ふ、間違いなく雇人を使つていそうな、由緒ありげな中規模の店へと入つて行つた。「いらつしやいませ」受付の麗人が迎えてくれる。さてもどう切り出したらいいものか青年は一瞬でも逡巡気味である。





【横浜中華街・善隣門】

受付けのカウンターの内側には格子縞のスカートスーツを粋に着熟した40前後の美人がいて、中華風にアレンジされた高級感漂う店内のデコレーションとも絡め、着の身着のまま姿の青年はいかにも場違いだ。それがよく判っている青年は顔が上気してなかなか言葉が出て来ない。「どうぞ、お席の方へ」の声に「はい、あ、あの…その、ち、違うんです。僕はその…」「…?」「あの、お、表の貼り紙を見

て、それで…」やつと合点が行った風の女性は「ああ、応募の方ね。ボーイさんね?」と訊いてくる。諾なりを述べて青年は固まった。ここで何とか住み込みの話を通さなければ今夜もまた公園で寒さに震えながら過ごさねばならない。昨晩一回で身に染みっていた。しかし女性はお構いなく「それでしたらね、今日の夕方にもまた来てください。ボーイの面接は男性のマネージャーがするから」と至ってつれない。夕方まで待つ?…青年の頭の中はパニックだった。いったいどこで?…それにもしその時雇い入れが決まらなければ時間的に云って今夜の野宿は必定だ。あれやこれやとつまらぬことを云いながら青年は粘った。「ああ、そ、そうですか…し、しかし、僕はその、住まいが川崎で離れていて…出直すのも大変ですし…」タイトスカートの美人は閉口し始めたようだ。何を分けの判らないことを、時間を潰せばいいだろうにとか思い、何か変ねえと勘繰り出しもしたようだ。万事休す…全身で落胆を表して青年が踵を返そうとした時、「あ、待って、待って。来てる、来てる。奥さんが来てる」とカウンターの奥から甲高い今一人の女性の声がかかった。見ると至って小柄な、

殆ど少女のような感じの事務員がもう一人奥にいて美人の同僚に注進に及んだのだった。「え？奥さん来てたの？ああ、そう。でもボーイの面接は高さんの方がいいでしょうに」と云うのに「ううん、平気よ。奥さんは何でも仕切るから。私が呼んで来てあげる」と云いざまカウンターから出て来て青年にニッと微笑んでみせるとカウンター脇の階段を一気に駆け上って行った。こちら美人の方は気が乗らぬげに青年に渋々と席を勧める。借りて来た猫のように消え入りそうな様子で青年が席で待っていると、幾許もなく小柄な事務員に先導された奥さんが二階から降りて来た。李夫人、緑色のチャイナドレスを身に纏った四十代半ば頃と思われる、目を見張るような麗人だ。境遇も忘れ果て、青年の目は華に吸い寄せられた…。



【横浜中華街・善隣門】